

## 「承香殿の女」の行方：『在明の別』における『とりかへばや』受容の一端

宮崎，裕子  
自由ヶ丘高等学校常勤講師

<https://doi.org/10.15017/19511>

---

出版情報：文献探究. 47, pp.72-78, 2009-03-31. 文献探究の会  
バージョン：  
権利関係：

# 「承香殿の女」の行方―『在明の別』における『とりかへばや』受容の一端―

宮崎裕子

一

平安末期から鎌倉初期にかけて成立したと推定される中世王朝物語『在明の別』は、男装した女性を主人公とする作品であり、言うまでもなく、この主人公の造型には、男装の麗人の活躍を描く物語の嚆矢として夙に有名な『とりかへばや』の影響が見える。

残念なことに、『とりかへばや』の原作本である古本は散逸しているので、改作本『今とりかへばや』のみを対象として比較するしかないのだが、『今とりかへばや』の女中納言が、右大臣の四の君を妻とし、麗景殿女御の妹と疑似恋愛的に語らったのと同様に、『在明の別』の主人公も、対の上という妻を得、承香殿の女と歌を詠み交わす、といった共通点がある。

ただし、男装の女君と女装の男君との入れ替わりを描く『今とりかへばや』では、麗景殿女御の妹が、後に女君と入れ替わった男君と結ばれ、彼にとって唯一の妻の娘を出産しているのに対して、主人公が兄妹の一人二役を演じる『在明の別』では、右大将が死去したと公表

された後、承香殿の女は出家して大原に隠棲するという違いが見られる。

これは、単なる『今とりかへばや』と『在明の別』との基本設定の違い、と片付けられるのではなく、先行作品を物語取りするに際して、決して安易な模倣はしない、という『在明の別』の一貫した創作姿勢の顕れであろう。主人公と対の上との関係も、『今とりかへばや』に做った男装の女性とその妻という取り合わせではあるが、『在明の別』が描くのは、『今とりかへばや』の女中納言と四の君の如き「男装の夫とその妻との心のすれ違い」ではなく、あくまでも純粋な女性同士の親密な関係なのである（注1）。

主人公と承香殿の女との関わり合いも、『今とりかへばや』の女中納言と麗景殿女御の妹との関係を下敷きにしてはいるが、承香殿の女に課せられたのは、麗景殿女御の妹とは全く異なる役回りであり、本稿では、その承香殿の女が担う役割を明らかにしたい。

二

『在明の別』の主人公である右大将は、太政大臣家の一人娘なのだが、男子をもうけることの出来なかつた父大臣は、自家の後継者を獲得する為、娘に男性として生活させ、もう一人深窓に閉じ籠もる架空の妹姫を作り上げて、一男一女がいると世を偽っていた。心ならずも男装して世に交わっていた右大将は、太政大臣の弟である関白が後妻の連れ子である対の上に強引に言い寄って身籠もらせたことを知り、密かに彼女を自邸へと連れ帰る。やがて対の上が出産した男児（後の「左大臣」）を自分の子供と公表して目的を達成した右大将は、女性の姿に戻って出家することを望みながらも、それを果たせぬまま日を重ねていた。

八月十五夜、宮中で月の宴が催された暁近く、「承香殿の細殿」の前を通りかかった右大将は、承香殿の女から呼び止められ、御簾越しに歌を詠み交わす。

ときのまも袖にうつしてなれみばやくもぬにすぐる月のひかりを

といふ（承香殿ノ女ノ）こゑ、いとわかやかにあてにきこゆるも、  
たればかりとにくからず。

くも井にてうはのそらなる月かげをいづれの袖とわきてたづねん

とて、（右大将ガ）しばしちちどまり給えるは、いかばかりめづらしからん。  
（巻一340頁／注2）

宮中の「細殿」での出会いは、『今とりかへばや』と同じで、女中納

言と麗景殿女御の妹とが出会った場所も「麗景殿の細殿」である。

翌八月十六日、参内した右大将は、遂に帝から女性であることを見破られた。その帰途、正体を暴かれた衝撃にうちひしがれた右大将は、再び承香殿の細殿を通りかかり、右大将が退出してくるのを待ち侘びていた承香殿の女の気配を察する。全てに秀でた素晴らしい貴公子と世人に讃えられ、自身の優れた才学に矜持を持っている右大将は、まもなくこの世から消えてしまう「男性としての自分」を覚えていて欲しいとの気持ちから、彼女に語りかける。

かやうのまじらひも、いまいく夜かはおぼさるれば、なを人に  
しのばれまほしきなげのすさみにや。

わするなよゝなく、みつる月のかげめぐりあふべきゆくゑな  
くとも

すぎがてに、いふともなき御けはひを、（承香殿ノ女ハ）げにと  
びたつばかりぞ思ふべき。

めぐりあふひかりまでとはかけずともしばしもやとをありあ  
けの月

とまで思けるこそいとをしけれど、心ちかきみだりなやましけれ  
ば、あけはてぬさきにと、いそがれ給。  
（巻一344頁）

男装を解かざるを得ない情況に追い込まれた際、一度だけ言葉を交わしたところのある女性に暇乞いをする、という場面も『今とりかへばや』を下敷きにしたものであって、懐妊したことによって姿をくらす決意を固めた『今とりかへばや』の女中納言も、失踪前に麗景殿女御の妹のことを思い出し、彼女のもとを訪れて、再び歌の遣り取りをして

いる。

(女中納言ガ) 麗景殿のわたりをいと忍びやかに立ち寄りて、

冬に見し月の行方を知らぬ哉あなおぼつかな春の夜

の闇

と、末つ方おもしろくうそぶきたるに、(麗景殿女御ノ妹ハ)ふとさし寄りて、

見しまゝに行方も知らぬ月なれば恨みて山に入りやしにけん

と答ふる、ありしけはひなり。

(巻二208頁/注3)

『今とりかへばや』のこの遣り取りで「月」に譬えられているのは麗景殿女御の妹であるのに対し、『在明の別』では男装の女性の方が「月」に譬えられているという違いはあるものの、男性としての生に決別する覚悟を秘めた語らいの場面で「月」の詠歌を交わすのは、明らかに『今とりかへばや』からの物語取りである。

承香殿の女の前から慌ただしく去り、太政大臣邸に帰り着いた右大將は、女性であることを露見された心労のあまり病臥したが次第に回復し、賀茂への行幸に随行する。男装を解いて本来の姿に戻ろうと決意し、男性としての最後の栄えある姿を世の人々の目に焼き付けるべく、きらびやかに装って供奉する右大將の姿に、承香殿の女は魅惑されるのだが、その際の彼女の心理描写にも、『今とりかへばや』の麗景殿女御の妹が男装の女君に対して寄せる心情を做ったと思われる箇所がある。

まして時のまもとかや、うちたえきこえし(承香殿ノ女ノ)心に

は、をりしもあれ、(右大將ノ)いみじかりし御心ちのほどを、わがみひとつのうゑがをに思しほれつるを、かくまいり給よしきくに、いみじううれしうて、まどひいでたる物は、(右大將ハ)かけてだにしり給はじかしと思より、ひのくまがはのわりなきに、心をくたくゝるまのまへにしも、御ずいじんのいひしらぬくるこまのそらをとぶ心ちして、人のしわざともみえず、かけるやうにはしりめぐるほど、(右大將ハ)いとしづかにをしとぞめ給えるに、……さりげなくのどやかなる御しりめのほど、あまりまばゆきひかげに、あふぎをさしかくし給える御てつきなど、たゞ「いかにせんく」とぞおぼしまどはるゝ。(巻一349〜350頁)

自分と語らったその日から病に伏せつた右大將の身を案じ、嘆いていた承香殿の女は、右大將が行幸に供奉するまでに回復したことを喜び、そんな自分の気持ちを知るはずもないと思いつながらも、牛車の中から、賀茂へ向かう行列を見つめている。自分の前で少しの間だけでも馬を止めて欲しい、という承香殿の女の切実な願いに応えるかのよう、随身の騎馬が急に暴れ出し、その騒ぎが収まるまで、右大將は彼女の車の前に静かに佇んでいた。

右大將が重病を患つたと聞いて心痛に沈んでいた承香殿の女の心情を語る「I」は、『古今和歌集』の「月見れば千々にもこのそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど」(巻第四・秋歌上・一九三番/注4)に拠る表現で、失踪中の女中納言を案じていた麗景殿女御の妹の心情が語られる『今とりかへばや』でも、この歌が引かれている。

女は、何となくなつかしくうち語らひ給ひし夜な〜のこと忘る

ゝ世なく、(女中納言ガ)世の中に跡絶へ給りしころも、たゞ我身ひとつの事と恋しくかなしく思ひ出聞えし人なれば、……。(巻四324頁)

右大将に自分の前で立ち止まって欲しいと望む承香殿の女の心境を表現した「II」も、『古今和歌集』の「さゝのくまひのくま河に駒とめてしばし水飼へかけをだにみむ」(巻第二十・神遊びの歌・一〇八〇番)を引いたもので、これも、麗景殿女御の妹が女中納言に自分の前でしばらく立ち止まって欲しいと切望する、『今とりかへばや』の次の場面と典拠を同じくしている。

(女中納言ハ、宮ノ宰相ガ女房タチノ居ル御簾ノ前デ必ず立ち止マルノヲ)後目に見をこせつゝ過ぎぬるを、(女房タチハ)檜隈川ならば、「しばし水かへ」ともうち出でつべく、みな見送らるゝ中にも、しみていみじと思ふ人(麗景殿女御ノ妹)ありけり。(巻一129頁)

この後、再び病臥した右大将は、男装を解いて本来の姿―架空の存在であった妹姫―に戻る。右大将は「死去」と公表され、その喪が明けるとすぐに妹姫は女御として入内した。

『今とりかへばや』では、兄妹それぞれが本来の性に戻っており、失踪した女中納言をひたすら案じ続けていた麗景殿女御の妹のもとには、女君と入れ替わった男君が通うようになる。やがて彼女は男君との間に女兒をもうけ、姉女御と共に彼の庇護を受けて平穩に過ごし、彼女が産んだ娘は東宮の女御となつて物語は大団円を迎える。

しかし、入れ替わるべき兄弟がない『在明の別』には、右大将を慕う承香殿の女を訪れる者は無く、女御となつたかつての右大将は、儂く言葉を交わしただけの彼女の存在を記憶の片隅に追いやったまま、帝の第一皇子を出産して立后し、更にその皇子の即位によつて女院号を得る。こうして歳月は流れ、右大将の「死去」から二十年ほどを経て、忘れられていた承香殿の女は再び物語の表舞台に姿を現す。麗景殿女御の妹とは違う役割を演じる為。

### 三

右大将が死去したと公表された直後、承香殿の女は、男性としての自分を偲んで欲しいと右大将が発した言葉を胸に、出家して大原に隠棲した。それから二十年ほど後、故右大将の息子(ということになっている)左大臣は、大原で大雪に遭い、ふと見かけた庵に立ち寄り偶然にもそこは承香殿の女の庵で、右大将の遺児に出会えた懐かしさに、彼女は自身が世を捨てるに至つた経緯―「みをいたづらに思なり侍にし、もとの心」(巻二403頁)―と、依然として胸中に燻り続けている右大将への思慕の情とを、左大臣に打ち明ける。

たゞ(右大将ノ)ゆめの御事のはをうけ給はりしばかりにて、(右大将ガ)いまはかぎりときゝなしたてまつりし心まどひ、さらによにながらへん物と思給えられざりしかば、やがてこのやまにこもり侍りて、かゝるゆゝしきさまになり侍にしかど、なをいまはとならせ給し八月十六日のあか月にや侍けん、よふかくすぎさせ給しが、たゞしばしたちどませ給ひて、『わするなよ』との給

はせし御けはひ、そのよの御ふ多のねなど、思いつるをりく／＼な  
ん、むなしきいると思はなれ侍ぬるみちにたちかへり、なみだの  
そむるくれなゐを、え思かへし侍らぬ……。 (巻二404頁)

実はここにも『今とりかへばや』の麗景殿女御の妹を下敷きにした  
と思われる箇所がある。女中納言が麗景殿女御の妹と「月」の歌を詠  
み交わした『今とりかへばや』の前掲箇所では、初めて言葉を交わし  
て以来数カ月ぶりに、「冬に見た月の行方を御存知ですか。」と語りか  
けてきた女中納言に対して、麗景殿女御の妹は、「一度言葉を交わし  
ただけで、全く訪ねて来てもらえない月ですから、あなたの冷たさを  
恨んで山に入ってしまったのではないでしょうか。」と答えている。

この後、兄妹が入れ替わりを済ませた『今とりかへばや』では、男君  
が麗景殿女御の妹のもとへ赴き、行方を訪ねてもらえた彼女は「山に  
入」ることなく彼の愛人となるのだが、右大将に探してもらえないはず  
もない承香殿の女は世を離れて「やまにこも」る。主人公が男装を解  
いて以降、それまでは似通っていた麗景殿女御の妹と承香殿の女の人  
生は、全く別の方向へ進んでいくのだが、実は、承香殿の女の出家に  
も『今とりかへばや』の麗景殿女御の妹の姿が投影させられており、  
麗景殿女御の妹が詠んだ〈虚構〉は、『在明の別』において、承香殿  
の女の身の上に〈現実〉のものときせられているのである。

帰京した左大臣は、女院に大原での一件を告げる。ようやく承香殿  
の女のことを思い出した女院は、死去したと世を欺いて姿を消した右  
大将の為に彼女が世を捨てていたことに愕然とし、亡兄の心中を推し  
量るといふ形で自身の心情を吐露する。

げにそのをりは、かばかりふかうしもおぼえざりし物を、いとあ  
はれに心づよかりし(承香殿ノ女ノ)けはひをおぼしいづるに、  
やつしすてけるをきかせ給に、御なみだこぼれて、「いとあはれ  
なりけることかな。……さるはそのころ、(右大将ハ)さなんか  
たり給し。いまひとたびなさけみえんとありし物を、さばかりは  
えおぼしよらざりけん」といみじくあはれがらせ給。

(巻二405〜406頁)

自分は承香殿の女に少しばかり言葉をかけただけで、さほど深い情を  
抱いてはいなかった。それなのに、彼女は死んだ右大将の為に髪をお  
ろしてしまうほど一途な思慕を寄せ、いまだに「男性としての自分」  
を忘れられずにいるのだと知り、女院は激しく心を揺さぶられて、男  
装時代の手蹟でしたためた歌を、人目を忍んで彼女の庵へ届けさせた  
(注5)。

かくれにし月のゆくゑをわすれずはそなたのそらのみちをたづね  
よ (巻二406頁)

左大臣に故右大将を忘れられずにいた思いの丈を語り、俗世への執  
着を断ち切った承香殿の女は、ひたすら念仏に専心して日を送ってい  
た。そんな彼女のもとに、ある朝、在りし日の右大将の筆跡で書かれ  
た、天上界での再会を期するが如き歌が届く。積年の思いが報われた  
彼女は、浄衣を身に纏い、仏の前に籠もって念仏を唱えながら彼岸へ  
と旅立つ。

いとゞしくきよきころもをき、ねん仏たゆみなくして、ほとけにむかひたてまつりて、たてこもりにけるまゝに、三日といふにいきもたえにけり。(巻二406頁)

ここに描かれているのは一種の「女人往生」なのかもしれない。そして、右大将の言葉に従って承香殿の女が訪ねて行くのは、その右大将―「かくれにし月」―が居るはずの「そら」の何処かなのだろう。

それにしても、仮初めに言葉を交わしただけですっかり右大将から忘れ去られていた承香殿の女が、二十年の歳月を経て再び表舞台に姿を現すのはなぜなのか。そこには、右大将が知らずに犯した「罪」の顕在化という意味合いがあるように思われる。

#### 四

『在明の別』の女院は、「かぐや姫的人物造型」(注6)をなされておられ、その正体は地上に転生した天女である、ということが巻三において明らかにされる。夫である院の四十賀で、女院が東宮(女院所生の第二皇子)の笛に合わせて琵琶を演奏したところ、院の御所に七人の天女が舞い降りた。かつて女院と共に天上界で過ごした昔を懐かしみ、そこでの再会を誓う歌を詠み交わして天へ還って行く天女の残り香が、女院の放つ世の常ならぬ芳香と同じものであることから、女院の前身は天女であったのだと判明する。

つまり、右大将は、太政大臣家の後継者問題を解決する為に地上へと遣わされた「かぐや姫」であったのだが、かぐや姫が月に帰還すべき「八月十五夜」に昇天の機会を逸してしまつたがゆえに、翌八月十

六日に帝から男装の秘密を暴かれ、家の後嗣を獲得する役目を果たした後も、女性として地上に留まらざるを得なかつたのである(注7)。

では、なぜ右大将は「八月十五夜」に昇天の機会を逸したのであるうか。かぐや姫が地上に降ろされたのは罪を犯したからであり、この世に留め置かれた右大将も、何らかの罪を犯していたとするならば、それは、承香殿の女に対する「罪」であつたのかもしれない。

「隠れ蓑」という隠身の術を使うことができた―ただし、女性の姿に戻つてからは、この不思議な力を失っている―右大将は、様々な男女の情事を垣間見、その様相に失望を禁じ得なかつた。

継娘を脅迫して密通する関白の姿に、

あなうたて、をとこの心はうき物なりけり。(巻一313頁)

と嫌悪を感じ、言葉巧みに女を欺く三位中将(関白の息子)の態度には、「あやなく、なべてのよぞうとまれ」て、

たゞをなじ身の、なを女こそくちをしく人にあざむかれんとなれる物にはありけれ……。(巻一315頁)

と慨嘆し、「男は平然と女を欺むいて不幸に陥れる」との諦念を抱くに至る。

ところが、同性たちに同情し、女性を裏切る男性全般に憤りを覚えていた右大将自身が、承香殿の女に仮初めの言葉―「ゆめばかりのなげの御ことのは」(巻一344頁)―をかけ、彼女の心を惑わせてしまった。その言葉がきっかけで、承香殿の女は右大将への思慕の情を募

らせるものの、右大将はそんな彼女を少しも顧みることなくこの世から姿を消す。その死を悼むあまり出家するまでに、承香殿の女は思い詰め、その後二十年近くも、「男性としての自分」を覚えていて欲しいと発した右大将の「わするなよ」という言葉を胸に彼を偲んで涙を流していたというのに、女性として生き続けるかつての右大将の心中に、彼女のことは全く浮かんでこない。

一人の女性の身を徒にし、長い間捨て置いた。右大将が昇天を果たせずに地上に留め置かれたのは、八月十五日の夜に端を発したこの罪ゆえではあるまいか。そして、右大将の手蹟による歌を贈られて承香殿の女の思いが報われ、彼女の魂が長きに亘る右大将への執着から解放された時、男装時代から続く女院の罪障も贖われた。天女が降りてきて、女院の前身が明らかにされるのも、罪障消滅により、天上界に還ることが約束されたからこそなのだろう。いつの日か女院は天上界に転生し、彼女より先に、右大将がいるはずの「そら」へ旅立った承香殿の女は、本来の姿を取り戻したかつての右大将と念願の再会を果たすに違いない。

このように、『在明の別』の承香殿の女は、『今とりかへばや』における麗景殿女御の妹の安易な模造品では決してない。男装の姫君に、彼女自身が厭う男性たちと同じ「罪」を背負わせ、贖罪をさせる。それは、同じ男装の麗人ではあっても、『今とりかへばや』の女君には課せられることのなかった、言わば「男性としての罪」である。太政大臣家の後継者を手に入れるという務めを遂行して昇天するはずの右大将に罪を負わせ、女性として地上に繋ぎ止めておく。その役割を担うのが承香殿の女なのである。

## 注

(1) 拙稿「女たちの世界―『在明の別』が描いた(女性同士の夫婦)から」(辛島正雄、妹尾好信編『中世王朝物語の新研究―物語の変容を考える―』[新典社、二〇〇七年]所収)。

(2) 『在明の別』の引用は、『鎌倉時代物語集成』に拠り、一部私に本文を改めた。

(3) 『今とりかへばや』の引用は、『新日本古典文学大系』に拠る。

(4) 『古今和歌集』の引用は『新日本古典文学大系』による。

(5) この歌に見える「月のゆくゑ」は、女中納言が麗景殿女御の妹に語りかけた『今とりかへばや』の歌の「月の行方」を意識したものであるうか。また、八月十六日に承香殿の女が右大将に返した歌にある「ありあけの月」の語も、女君と入れ替わった男君との「再会」を果たした際の麗景殿女御の妹の詠歌「かくばかりうかりける身のながらへいつまでか世に有明の月」(巻四327頁)に共通のものである。

(6) 大槻修『有明の別れ』の人物造型(『中世王朝物語の研究』[世界思想社、一九九三年]所収)。初出は『有明の別れ』の女君―その人物造型をめぐって―(『源氏物語及び以降の物語 研究と資料(古代文学論叢第七輯)』[武蔵野書院、一九七九年]所収)。

(7) 辛島正雄『在明の別』覚書(『中世王朝物語史論 上巻』[笠間書院、二〇〇一年]所収)。初出は「リポート笠間」31号、一九九〇年一〇月。

(みやざき ゆうこ・自由ヶ丘高等学校常勤講師)